

四十年後の鎮魂歌

たなか踏基

文芸社の販売力と企画部のご好意に惹かれ、小説の全国出版を私が決意した背景に、無形の励ましで、背中をポンと押してくれた二人のアーティストの存在がある。一人は群馬のセミプロ級の山岳写真家で、もう一人は透明な歌声の Singer Song Writer である。

今年の八月一日のことである。同世代で旧知の友人が、山岳写真集を東京新聞から出版したのを記念して、写真展を開催すると言うので、私は家内と連れ立って久し振りに会場の銀座富士フォトサロンに観に出掛けた。

群馬山岳写真同人所属の友の出版は、今回二度目であった。上州瓦製造の老舗の瓦屋の社長の彼とは、十年來の付き合いである。以前から「山と渓谷」「岳人」誌に写真を投稿して賞に輝く、優れた山岳写真家でもある。如何にも中小企業の親父然とした雰囲気で、見事な写真を撮溜めるアーティストには、とても思えない風貌である。山岳写真は、あくまで息抜き趣味だと公言する友である。

雑誌や地方自治体の各種受賞の知らせを逐一聞くに付け、作品をこうして世に問う、友人の姿勢が日頃から大変羨ましく、刺激を受けてきた。意欲的な友の展示を目の当たりにして、同世代の私も、何時か自分の作品を生きた証として、後世に残したいと願う強い衝動に駆られて会場を出た。私の作品とは、写真ではなく、大学寮生時代に原稿用紙を密に埋めた小説のことである。大学の六華寮・悠

久寮二つの寮に居る間に書溜めていた。

もう一人出版を勧めてくれた新潟出身のアーティストがいる。彼女の二人の兄さんが大学同窓だったのも縁となった。目下叙情歌のサードルバム製作奮闘中である。自宅をライブハウスに改築、月一度の定例ライブが既に六十回を超える。フォークギターを抱え楽しそうに歌い語る。ファンも軽妙なお喋りに堪能し共に歌う。聞けば、音楽をライフワークに定めたのは二十代後半で、末娘の小学校入学を期に、長年の夢 Singer Song Writer への転進を決断したと言う。学生時代から温めてきた憧憬であった。歌をただ聞かせるだけではない。参加した人全員を楽しみ空間に誘い、その雰囲気共有できたらと彼女は願っている。その人柄に魅せられて通うようになったファンは多い。同窓会活動の余興で知遇を得て以来、彼女の生き方を見聞きしていると、勇気が湧いて来るから不思議である。

私は、会社定年まで一貫して化学技術畑を歩んだが、高校から大学の多感な青春期に、京都大学新聞社の懸賞小説に入選したことがある。選者は伊藤整と野間宏であった。私は慢心して、学業から逸れ小説にかぶれ、仲間と同人誌を創刊して遊んでいた。本気で上京を考えたのもこの頃である。卒業後の高崎の勤務先でも色気止まず、郷里松本の同人誌に作品を投稿した時期があった。私が絶筆を誓い創作の誘惑と決別し、会社業務に邁進できたのは、確か二十代後半の頃と記憶している。

平成十五年「踏基の小説の部屋」HP開設動機は、四十年後の鎮魂歌レクイエムである。作品葬り放しの咎を詫びて、可愛い吾子の魂

を慰めるミサ曲である。恥ずかしながら若気の至りの稚拙な作品、果して読者がいるのか甚だ疑問のまま、ただ甦らせてみたい想いに駆られたからである。言霊を鎮め、昔の夢を紡ぎながらの加筆修正は、実に愉しい作業であった。青春時代のギラ付く野心の棘が、心の臍から抜け落ちていたためかもしれない。こうした一連の作業は、右脳を刺激して呆け防止に有効であること期待している。

小説HP開設の私に、初めて出版機会が廻ってきた。本年一月、新風舎の大賞作品募集をHP上で知った。腕試しで応募の文学賞狙いの小説が、図らずも一次二次選考を通過した。三次入選に幸か不幸か至らなかったが、これが逆に他社企画部との出逢いに繋がった。文学賞の選から洩れた作品を拾い上げ、売りの独自配本ルートで「敗者復活」させる、文芸社の戦略方針と見事合致したからである。「喫茶店」と題すSF仕立ての候補作と「贗大人」二作品の原稿を、紹介を受けた文芸社の企画部に、私は駄目もとで郵送した。三週間後、二作品に対する過分な賛辞と、手厳しい批評が、同社の刊行審査委員会から届けられた。同時に、出版コストを版元と著者でシェアする、「協力出版」という独自の出版形態の提案を企画部より受けた。

未だアテネ五輪のメダルラッシュの余韻に、日本中が浸っている今、初版本から版数を重ねる度に増えると言う著者印税を夢みて、ゲラ刷り初稿を待ち焦がれる私が居る。まるで初孫子誕生を待つ老爺の心境であろうか。

了